

# ミャンマーの巨大ホミノイド化石が示す アジア産類人猿の進化史

## Discovery of huge hominoid fossil from Myanmar suggests a new evolutionary history of Asian hominoids



京都大学総合博物館 高井 正成

現在の地球上には、大型類人猿（ホミノイド）は、アフリカのゴリラとチンパンジー、そして東南アジアのオランウータンの3属しか生息していない。特に、アジアでは化石種の数も非常に少なく、5属しか確認されていない。即ち、トルコのアンカラピテクス *Ankarapithecus*、南アジアのシバピテクス *Sivapithecus*、中国南部のルーフォンピテクス *Lufengpithecus* と *Gigantopithecus*、そして東南アジアのコラートピテクス *Khoratpithecus* である。これらのアジア産の大型ホミノイドは、モザイク的ではあるが現生オランウータンと何らかの類似性を示すことから、全てオランウータン亜科に含まれ、アジアの化石ホミノイドは、複雑な進化史を経て現生オランウータンのみが生き残ってきたのだと考えられてきた。

本研究では、東南アジア大陸部に位置するミャンマー中部のテビンガン地域から見つかった後期中新世初頭（約900～850万年前）のホミノイド化石の解析を行い、その形態的特徴と系統的位置について検討した。テビンガンのホミノイド化石は、現生のメスのオランウータン程度の大きさの「中型ホミノイド」と、現生のオスのゴリラ程度の大きさの「大型ホミノイド」に分類される。前者は、テビンガンの隣接地域の同年代の地層から見つかったコラートピテクスとは明らかに違っており、どちらかというとなアジアのシバピテクスに近縁で、系統的にはオランウータン亜科に含まれる。一方、後者は上腕骨遠位端の化石しか見つかっていないのであるが、現生のオランウータンに見られる派生的な特徴が一切確認されず、オランウータン亜科には含まれないことが判明した。その巨大なサイズを加味すると、テビンガンの大型ホミノイドは史上最大の霊長類であるギガントピテクスの系統に属する原始的なホミノイドである可能性が高い。

ヒトの祖先を産みだしたホミノイドは、前期中新世にアフリカ大陸で起源したと考えられている。テビンガンの「大型ホミノイド」は、アフリカ大陸に生息していた原始的な初期ホミノイドが中期中新世までにアフリカ大陸からユーラシア大陸に進出し、その分布域を東南アジア地域まで拡散させて巨大なギガントピテクスに進化したと考えられる。一方、現生のオランウータンにつながる系統は、こういったギガントピテクス類とは別にアジア大陸に進出し、現生のオランウータンへと進化したのだろう。中国南部の広西壮族自治区の洞窟堆積物は、ギガントピテクスとオランウータンの化石が共産することが知られているが、中期更新世末に両者の運命が別れてしまい、前者のみが絶滅してしまったと考えられる。

【キーワード】 アジア産ホミノイド、巨大類人猿、化石、後期中新世、ミャンマー

【参考文献】

- Takai M et al (2021) New hominoid mandible from the early Late Miocene Irrawaddy Formation in Tebingan area, central Myanmar. *Anthropological Science* 129(1): 87-98.
- Takai M, Zhang Y, Kono RT, Jin C (2014) Changes in the composition of the Pleistocene primate fauna in southern China. *Quaternary International* 354: 75-83.